

調査報告

助産師学生が臨地実習で自己効力感を高める要因の分析

片倉 裕子

(2012年10月12日受稿)

抄録： 本研究の目的は、助産師学生が臨地実習で自己効力感を高める要因を分析することである。大学院生3名を対象にバンデュラが述べている4つの情報源を基に半構造化面接を行い、逐語録をデータとして内容を帰納的に分析し類型化した。その結果、遂行行動の達成では、【体験を通して深まった助産技術】【効果が出たと実感したケア】【学習・演習後の効果的な実践】、言語的説得では、【褒められた良い評価】【学習意欲につながる言葉】、代理的体験では、【好ましい助産技術と専門職の態度】【納得のできない体験】、情動的状态では、【実習1週目から現在の気持ちの変化】【向上したい気持ち】【体調に左右される気持ちや行動】が抽出された。助産師学生は、人との関係性を維持し助産技術を通して、臨地実習で遂行行動の達成である成功体験、言語的説得での賞賛と良い評価、学生自身が臨床で今必要な行動と結びつく言葉、代理的体験で助産師の知識や技術の修得、専門職としての豊かな人間性に近づくこと、情動的状态では気持ちの変化を感じながら自己効力感が高めていることが明らかになった。

I. 緒言

助産師学生は、助産の対象をウェルネスの視点でケアをするので、理論的根拠に基づいた高度な知識と技術の修得が期待される。そのためには、倫理観に基づいた人間性と生命に対する深い理解、専門的知識や技術を行う自己決定と行動に対する責任感を身につけなければならない。そして、全ての発達段階の女性に対して生命と人間としての尊厳と権利を尊重したケアをする役割と責務を果たすために学ぶ必要がある。気持ちを高めて助産ケアを学ぶことで人間としても専門職業人としても成長をすることが期待できる。やる気をもってケアをすることで対象理解と助産の学びが深くなり、個性のあるケアを実践できるように成長し続ける可能性があると考えられる。長期間の助産学基礎実習で新しい環境・人との関わりの中で、助産に対する関心と意欲を高め、小さなことでも成功体験をもつことができれば、次の課題に挑戦できるので実習体験は重要である。実習で学生が自

信と意欲をもつためには自己効力感を高めることが必要である。

これまでの実習指導で助産師学生が個性のある助産ケアを実践して、それが成功したと感じられる体験で対象者から賞賛と良い評価を受けた時に自己効力感が高められていた。また、助産技術の実施で学生が対象者に効果的なケアができた時、次へのやる気へとつながっていた。学生は困難に直面し乗り越えた時や自身の目標が達成された時、意欲をもって実習を継続しながら専門職としても、人間としても成長していたことに興味をもった。それを学ぶうちにバンデュラ¹⁾の自己効力感を高める4つの影響要因を検証することで効果的な指導を深めることができると考えた。

日本では1979年にバンデュラの著書が原野らによって翻訳され、1986年に板野と前野²⁾による日本語版の一般性自己効力感尺度(GSES)が作成されるなど、1980年代の研究は主に心理学者らによって取り組まれてきた。年代が進むにつれて糖尿病の患者教育、心臓リハビリテーショ

ン、高脂血症者の自己効力感や胃切除術後患者の介入評価における自己効力感の活用がされてきている。中川ら³⁾は、看護基礎教育における自己効力の研究は1994年の看護の学会集録に初めて報告され、また、原著論文が発表され始めたのは1998年からであると述べている。自己効力を用いた看護教育に関する尺度として山崎ら⁴⁾による患者とのかかわり尺度、遠藤ら⁵⁾による臨床実習自己効力感尺度、眞鍋ら⁶⁾による臨地実習自己効力感尺度が作成された。看護研究者による臨床看護研究も報告され、癌患者、要介護高齢者などの様々な対象者向けの尺度が開発されている。山崎ら⁷⁾は、看護学生が臨地実習をする上で自己効力感が低いと実習に意欲がもてず、知識や技術の修得が遅れ、困難な課題に直面すると実習目標が達成できにくい状況になる。しかし、自己効力感の高い学生は困難な課題に直面しても最後までやり遂げると述べている。助産師学生においても臨地実習での助産ケアの場面では同様のことが言える。近年、助産師として就職しても早期退職してしまう状況でありその一因として学校で学んだことと臨床でのギャップが考えられる。下村ら⁸⁾は、学生時代に臨地実習で理論と臨床を統合して技術全般に自己効力感が高められたと感じられた時、実践的活用の実習経験をすることで上手く乗り切れる可能性もあると述べている。自己効力感が高いことによって困難を乗り越える意思が形成され、将来多くの課題達成に向けて取り組める医療職が育成される。助産師学生が自己効力を高め主体的な学習へと発展させていけるような教育が必要であると考えられる。

II. 研究の目的

本研究の目的は、助産師学生が助産学の基礎実習で自己効力感を高める要因を明らかにすることである。

III. 用語の定義

1. 自己効力感

臨地実習で助産師学生が助産ケアを行う過程で望む成果をもたらすと考えることに加えて、行動が実践できると確信することである。

2. 情報源

バンデューラが述べている自己効力感に影響を及ぼす4つの要因としての遂行行動の達成、代理的経験、言語的説得、情動的状態である。

3. 遂行行動の達成

臨地実習がうまく達成できたという成功体験をもつことである。

4. 言語的説得

教員、臨床指導者、妊産褥婦、学生から行った助産ケアに対して評価や励ましを受けることである。

5. 代理的経験

教員、臨床指導者、学生が実際に行った他者の助産ケアや言動を観察することである。

6. 情動的状態

生理的変化や感情の変化を経験することである。

IV. 研究の方法

1. 研究デザイン

本研究は質的記述研究である。

2. 研究協力者

ストレートでA大学大学院助産基礎分野に入学し、依頼協力を得た年齢が22-24歳の助産師学生3名で、助産学基礎実習が3-4週経過し妊娠期・

分娩期または産褥期を経験している。

3. データ収集方法

2010年7月2日（金）の午後に2名，2010年7月9日（金）午後に1名，1名40分程度実施する。全実習期間毎週金曜日，実習のない帰校日を選択した。A大学院の個室で実習のない帰校日に依頼協力を得た3名の学生に半構成的面接法でインタビューをした。内容について許可を得てICレコーダに録音しメモを取った。

4. データ分析方法

- 1) 録音した内容を逐語録に記述した。
- 2) 熟読し要約をして，意味，内容の類似性，相違性を検討しコード化した。
- 3) 整理して要約毎に分類し，データと対比しつつカテゴリー化した。

5. 倫理的配慮

研究の意義，目的，方法を十分説明し，書面や口頭で説明し同意を得て行った。得られたデータからの個人情報保護を徹底した。本研究は，天使大学研究倫理委員会で承認を得た（承認番号2010-10）。

V. 結果

1. 研究協力者の属性（表1）

研究協力者の年齢は，22歳－24歳で，志望動機が明らかであり，看護大学卒業後ストレートで入学した助産師学生3名である。2名が家族と同居，家族の看護，介護経験がある。臨床実習を2名は3週間，1名は4週間終了している。実習経験は2名が分娩介助を1例，1名が分娩介助1名と産褥実習を終了している。

表1 研究協力者の属性

	A氏	B氏	C氏
年齢	24歳	22歳	22歳
学歴	看護大学卒業後ストレートで入学	看護大学卒業後ストレートで入学	看護大学卒業後ストレートで入学
志望動機	従兄の出生をきっかけに母性領域に興味をもった。	実母の妊娠歴を聞いて助産師について興味をもった。	看護学科での実習の喜びと友人の死から生命を考えた。
同居の別	同居	同居	別居
家族等の看護・介護経験	祖父の看取り経験	祖母の介護経験	無
実習場所	A病院	B病院	C病院
実習経験	妊娠期・分娩介助1例終了	妊娠期・分娩介助1例終了	妊娠期・分娩介助1例終了・産褥期
実習期間	3週終了	3週終了	4週終了

2. 4つの影響を及ぼす情報源のカテゴリーとサブカテゴリー（表2）

データ分析の結果，語られた内容は101項目，10カテゴリーと37サブカテゴリーが抽出された。以下，4つの影響を与える情報源の記述内容について，カテゴリー【】とそれに含まれるサブカテゴリー<>を表示している。

1) 遂行行動の達成

32項目の記述内容から，【体験を通して深まった助産技術】，【効果が出たと実感したケア】，【学習・演習後の効果的な実践】の3カテゴリーと13サブカテゴリーが抽出された。このことから対象の<継続体験からの面白さ>，<個別性の面白さ>，<触れる体験からの実感>で助産技術が深まっていると考える。また，<対象者がして欲しいことを思い浮かべたケア>，<対象の訴えに応えるケア>，<個別性を重視したケア>をすることで効果的なケアが実感できた成功体験をしている。助産ケアに関する記述項目が32項目中17項目と多かった。そして，<知識を踏まえた実践>，<演習後の実践>は役立つと感じている。しかし，<対象者に合わせられない助産技術>，<判断が

表2 4つの情報源の 카테고리【 】とサブカテゴリー<>

n=3

4つの情報源	10 カテゴリー【 】	37 サブカテゴリー<>
遂行行動の達成	<p>【体験を通して深まった助産技術】</p> <p>【効果が出たと実感したケア】</p> <p>【学習・演習後の効果的な実践】</p>	<p><継続体験からの面白さ></p> <p><個別性の面白さ></p> <p><触れる体験からの実感></p> <p><対象がして欲しいことを思い浮かべたケア></p> <p><訴えに応えるケア></p> <p><個別性を重視したケア></p> <p><知識を踏まえた実践></p> <p><演習後の実践></p> <p><動揺した気持ちが影響したケア></p> <p><判断できなかった助産技術></p> <p><一方的なケア></p> <p><学びのない指導></p> <p><視点の違いに対する指摘></p>
言語的説得	<p>【褒められた良い評価】</p> <p>【学習意欲につながる言葉】</p>	<p>○教員・臨床指導者</p> <p><自分自身の力量を考えて実施したことへの良い評価></p> <p><助産技術の良い評価></p> <p><見ていてくれたことを実感></p> <p><自分自身が認められる></p> <p>○妊産褥婦</p> <p><ケアに対してのお礼></p> <p><存在を認められた言葉></p> <p><ケアの効果を褒められた言葉></p> <p>○友人や学生</p> <p><気持ちを支え合う></p> <p><褒められ励まされた言葉></p> <p><未熟な助産技術に対する指摘></p> <p><助産師学生としての自覚を促す言葉></p>
代理的体験	<p>【好ましい助産技術・専門職の態度】</p> <p>【納得のできない体験】</p>	<p>○助産師</p> <p><好ましい助産技術></p> <p><豊かな人間性></p> <p>○学生</p> <p><好ましい助産技術></p> <p><助産師のケアへの疑問と産婦への危惧></p> <p><プライバシーが守られないことへの危惧></p>
情動的状態	<p>【実習1週目から現在の気持ちの変化】</p> <p>【向上したい気持ち】</p> <p>【体調に左右される気持ちや行動】</p>	<p><実習1週目、全体が把握できない辛い気持ち></p> <p><現在、実習で必要な助産ケアが考えられる気持ち></p> <p><看護学生の時と比較して褒められても怒られても向上したい思いの強さ></p> <p><新たな発見・期待で気持ちが高まる></p> <p><寝不足による考える力の低下></p> <p><体調が悪い時、気持ち下がる></p> <p><十分な睡眠後で体調が良い時気持ちが高まる></p> <p><気持ちをリセットできる対象がいる></p>

できなかつた助産技術>、<一方的なケア>、<動揺した気持ちが影響したケア>は気持ちが半減すると感じている。そして、教員や臨床指導者からの学生の<視点の違いに対する指摘>、逆に指導を受けられないことでの<学びのない指導>が意欲低下につながっている。

2) 言語的説得

32項目の記述内容から、【褒められた良い評価】、【学習意欲につながる言葉】の2カテゴリと11サブカテゴリが抽出された。このことから教員や臨床指導者からの<助産技術の良い評価>、<自分自身の力量を考えて実施したことへの良い評価>、<自分自身が認められる>こと、<見ていてくれたことを実感>して自己効力感が高められている。また、妊産褥婦からの<ケアに対してのお礼>や<ケアの効果を褒められた言葉>、<存在を認められた言葉>について学生自身が役立てたと感じている。さらに、友人や学生から<褒められ励まされた言葉>は<気持ちを支え合う>ことができ、情報共有と共にやる気につながっている。しかし、教員や臨床指導者からの<未熟な助産技術に対する指摘>や<助産師学生としての自覚を促す言葉>に対しては、意欲低下につながっている。

3) 代理的体験

11項目の記述内容から、【好ましい助産技術と専門職の態度】、【納得のできない体験】の2カテゴリと5サブカテゴリが抽出された。このことから、助産師の<好ましい技術>、<豊かな人間性>に触れた時に学習し自己効力感が高められている。また、他の学生の<好ましい技術>から自分自身を振り返って学んでいる。しかし、納得のできない体験である<助産師のケアへの疑問と産婦への危惧>や<プライバシーが守られないことへの危惧>に対しては、気持ちが半減している。代理的体験の項目が少ない。

4) 情動的状态

26項目の記述内容から、【実習1週目から現在の気持ちの変化】、【向上したい気持ち】、【体調に

左右される気持ちや行動】の3カテゴリと8サブカテゴリが抽出された。実習の1週目から現在までの気持ちの変化を感じ、<実習1週目、全体が把握できない辛い気持ち>があり、<現在の実習に必要な助産ケアが考えられる気持ち>と変化してきている。また、<看護学生の時と比較して褒められても、怒られても向上したい思いの強さ>や<新たな発見・期待で気持ちが高まる>という気持ちがある。そして、<寝不足による考える力の低下>、<体調が悪い時は気持ちが下がる>ことで実習へ影響することが考えられる。逆に<十分な睡眠後で体調が良い時は気持ちが高まる>ことが分かる。実習を継続するための原動力として、<気持ちをリセットする方法>、<気持ちをリセットできる対象がいる>ことが挙げられる。

VI. 考 察

1. 4つの情報源と自己効力感との関連 (図1-1)

1) 遂行行動の達成

バンデュエラが、4つの情報源の中で最も影響力のあると述べた遂行行動の達成は、本研究で、学生が実習体験を通して個別性や継続性の面白さを感じた時、自己効力感が高められていた。また、効果のある助産ケアを実践できた時、臨床指導者の良い評価や対象者からの賞賛やお礼言葉、良い反応や評価があり成功体験が実感でき自己効力感を高めていた。さらに、学生自身で行える助産技術や指導などの幅も看護学生の時と比較して広がっており、助産ケアの実践ができたという実感がやる気にさせていた。助産ケアの実践で効果が出ると、成功体験として自己効力が高まる。この遂行行動の達成で成功体験することが自己効力感を持続する上で最も影響を受ける要因であるのは明らかである。山崎ら⁹⁾は、行動の達成が自己効力感を高め、自己効力が高まることによって意欲が高まり、課題の達成が容易になるという相乗効果が期待できることを裏付けることができた。妊婦健診で保健指導をする時、身近な目標を

立てて課題をもってケアすること、妊産褥婦に本音で聴けることを目標にケアを実施して効果があると、気持ちを高めて課題達成に向けて努力したいと気持ちが高まっていることが分かった。この目標は、実習要項にある最終到達目標ではなく、学生自身が決めた身近な到達したい目標であり、それを到達できた時に自己効力感が高まっていた。新しく出会う人や緊張する環境である実習で、妊産褥婦への効果的な個性性を重視したケアの成功体験が自己効力感を高められることで、課題に向けて意欲的に学習することが分かった。江本¹⁰⁾が述べる自己効力感を得ると、与えられた課題を達成する可能性が高くなること、達成に向けて努力すること、似たような状況で行動の達成ができること、課題に対する不安や遂行行動の達成では、言語的説得と同様に語られた内容が32項目と多く成功体験が助産師学生に最も影響を与える情報源であることが分かった。しかし、遂行行動の達成で、対象者に合わせられない助産技術、動揺した気持ちが影響したケア、判断ができなかった助産技術、一方的なケアが意欲低下につながっている。また、教員から指導されずに学べなかったこと、未熟な助産技術に対する指摘に対して自己効力感が低下している。対象者に合わせられない助産技術や対象者への効果がない一方的なケアで成功体験がないことが自己効力感の高まらない原因であると考えられる。

2) 言語的説得

言語的説得について、助産技術の正確な実践に対してや効果的な助産ケアの実施ができた時に褒め言葉や良い評価をされたことで自己効力感が高まっている。行動の達成に言語が連動していることが分かり、効果的なケアを実施して実習の評価者である教員や臨床指導者からの良い評価をされることで気持ちが高まっている。また、妊産褥婦や友人から褒められ励まされた言葉も同様であった。臨床指導者からの厳しい指導が必ずしも気持ちが半減せず、逆に自己効力感が高められていた。熱意を伴う自分のために今臨床に必要な行動と直

ぐに結びつく言葉が学習意欲につながる。学生自身が効果的な指導であると感じた時、もっと知りたい向上したいという気持ちになり、自己効力感が高められている。これは指導を受け止めるだけで精一杯だった看護学生の時とは異なり、助産師として成長したいという気持ちが高まりであると考えられる。情動的状态でただ気持ちが落ち込むのではなく、向上したい、自分を信じて頑張りたいと紙に書きとめて振り返っていた。指導されたことを原動力にし、学生は視点を変えてとれえて助産技術やケアを向上させようとしている。再度実施する時は、助産ケアの実践やできるようになったことを示して、学生自身も認めてもらえるようになりたいと自己効力が逆に高まっている。また、友人や他の学生からの励ましはアドバイスだけでなく、気持ちの共有につながり、情報共有と共に気持ちが高まること明らかである。グループメンバーの存在、支え、励ましが自己効力感を高めた。山崎ら⁷⁾は、実習の体験を通して人間関係を形成する能力が高められて自信をつけていく傾向があり、その要因として学生自身が行ったケアの達成感や教員や臨床指導者から認められ褒められたと認識すること、あるいは学生同士で励まし合うことが自己効力感を高めるのに重要であると考えたと同じ結果だった。

言語的説得では、語られた内容が32項目と多く、遂行行動の達成での成功体験が言動と連動して相乗効果があると考えられる。しかし、未熟な助産技術に対する指摘や助産師学生としての自覚を促す言葉が意欲低下につながっている。一方的な言動は気持ちを低下させるが、厳しい言動でも納得できる内容であれば、自分のための指導であること、自分が向上するためであるとプラスに捉えて逆に自己効力感が高まっていた。言語的説得の項目で、何も指導を受けない時、学生は気持ちが半減したが、効果的な活動の評価を受けることで自己効力感が高まっている。ゲイバーソンとオールマン¹¹⁾は、学生は臨床指導者から褒められたり、失敗を指摘されたりすることに対して、

その場で説明されることは行動改善では重要である。活動の評価は学習過程でフィードバックすることでよりよい実践を行うために情報を与えることであると述べている。本研究でも臨地実習で自己効力感を高めるために、評価をフィードバックすることが重要であることが分かった。

3) 代理的経験

代理的体験では、観察学習で助産師から知識や技術の習得、他の学生の観察学習から、そして、助産師の専門職としての豊かな人間性に触れて近づきたいと考えている。多くの方法を応用し実践していた場面の観察学習は、学生自身が行っていた技術と比較して、自分自身でもできそうだと思う、良い技術を真似ることで磨かれ自己効力感を高めることができると考えている。また、人間としての尊厳と権利を尊重したケアをする役割と責務を果たすことを学ぶ専門職としての意識を感じることができた時、自己効力感が高められる。知識、技術、人間性へ焦点をあてて自己効力感が高められていることが分かった。山崎ら⁴⁾は、代理的経験の要因については、病棟スタッフや他の学生の経験を見たり、聞いたりすることによって自分にもできそうだと認識することで自己効力が高められている考えと同じ結果であった。

代理的体験が遂行行動の達成や言語的説得より語られた内容が11項目と少ないのは、実習場所で学生が観察学習より実際に実践を通して助産技術やケアを学習していること、印象的な場面を観察する機会が少ないと推測される。しかし、代理的体験では、納得のいかない体験として学生は病院環境で何もできないが、妊婦へのプライバシーが保てないことへの危惧があった。学生としては納得できないことに対する未消化の状態、ジレンマがある時に気持ちが半減していた。また、産婦への危惧とケアへの疑問があった時にも同様であった。チームで助産ケアを行う場合起こりうることであり、学生自身の考えとの違いで納得できないことをどのようにチーム内で助産ケアを実施していくか、自身の考えと整合性をつけていくか

が助産師として問われることになる。チーム医療の場合、スタッフの考え方、医師の方針、病院環境など多くの要因があり、個人の考えだけでは決定できないこともあるが、専門職としてどうあるべきかを考えを深める動機づけとなっていることが分かった。臨地実習での納得のいかない体験が自己効力感を低下させている。

4) 情動的状态

情動的状态では、実習の1週目では人間関係や環境に慣れていないが、実習の3-4週で環境へ適応すると気持ちも楽になり疲れも少なく実習をしている。実習での環境や人間関係から緊張感は強いため、気持ちを切り替える方法を持ち自己効力感を高めていた。気持ちの変化を捉えてどう対処すべきかを考えて行動していた。そして、新たな発見や明日への期待がある時は実習でやる気になり、実習へ行きたいという意欲につながっている。また、看護学生の時とは異なり、厳しい導を受けても向上したい気持ちを強く持っていることが分かった。情動的状态では、代理的体験より多く、語られた内容が26項目であり、学生自身が感情の変化に気づきその対応を考えて自己効力感が高められていることが分かった。しかし、情動的状态では、記録に時間を費やし寝不足による体調不良は考える力の低下となり、対象者のケアに影響することが考えられるので健康の自己管理の必要性を感じていた。また、課題や反省が多い実習は気持ちが半減して、自己効力感が低下していた。そのような時は、実習での原動力となる気持ちをリセットできる方法で自己効力感を高めていた。自身の気持ちの変化に気づきながら、実習での気持ちが高まるように工夫している。自分自身の気持ちの変化を受け止め客観視でき、実習を継続する原動力としての自分なりの気持ちをリセットし維持している。大学院生として実践したいことが明確であり、向上したい気持ちがそこに集約されている。

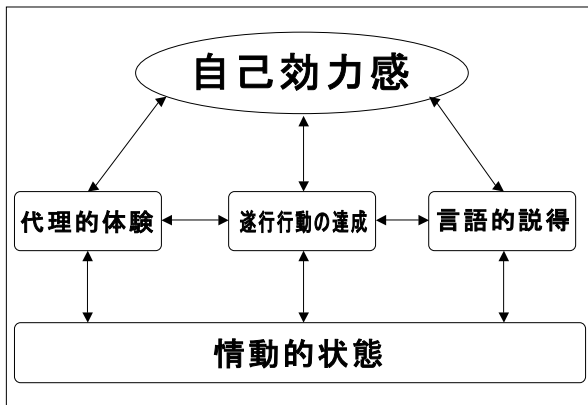


図 1-1 4つの情報源と自己効力感との関連図

2. 助産技術，人間関係と自己効力感との関連 (図1-2)

1) 助産技術と人間関係

助産師学生が助産技術を実践して効果が得られ、看護学生の時より実施できる幅が広がることでの楽しさを感じていた。その助産技術は、妊娠期でのレオポルド触診法、NST装着、妊婦健診での腹囲や子宮底測定、妊婦健診での保健指導（浮腫などのマイナートラブルの指導、栄養指導、パースプランの作成）、児心音聴取、分娩期での分娩第Ⅰ期のケア（助産診断、効果的な体位、温罨法）、分娩第Ⅱ期での直接介助と間接介助、産褥期での授乳介助、褥婦への退院指導、家族への沐浴指導が挙げられる。下村ら³⁾は、実習の前後で看護学生の看護技術に対する自己効力感は、基礎的な看護技術、高度な看護技術、コミュニケーション、問題発見・問題解決での4つの側面で大きく高まっていると述べている。本研究でも、助産師学生は、助産技術の実践を通して自己効力感が高まっている。対象者の行動や言動などの反応から効果があったと感じられた時に、役立てたこと、自己の存在が認められたことに対してさらに気持ちが高まっている。佐々木ら¹²⁾は、看護学生の信頼性が検証されている母性看護セルフ・エフィカシー尺度として25項目挙げている。3週間の臨床看護実習の最初の2日間に学内事前実習を組み込む形態をとったところ、母性看護セルフ・エフィカシー尺度は、学内事前実習前後で有意に高まっている。学内事前実習でそれを高めることの有効

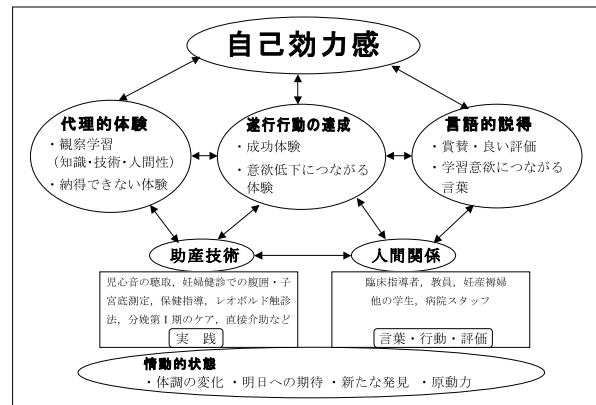


図 1-2 助産技術，人間関係と自己効力感との関連図

性が示唆されたのは明らかである。それは、基礎看護技術を行う看護学生で初学習者であり、助産師学生は実習での助産技術や指導は異なっているが、A大学院でも助産師学生は、学内事前学習で助産技術である特に直接介助を実施して実習に入っており、自己効力感を高めた状態での実習に入ることが予測される。また、実際に実践する助産技術も看護学生と比較して、専門性や具体性でその内容は異なり、幅広い助産技術を実施できること、将来助産師としての職業と直結していることで自己効力感が高まっている。遂行行動の達成で助産技術を実施した成功体験が意欲につながる要因となってことは明らかである。

助産技術を実践する時、必ずそこには実習で教員、臨床指導者、助産師、看護師などのスタッフ、対象者、その家族、他の学生との関係性が生じる。遂行行動の達成、言語的説得、代理的体験の結果でも人との関わりにおいて気持ちに変化している。眞鍋ら⁶⁾は、看護学生の臨地実習における自己効力感、対象の理解と援助、友人と指導者との関係性維持の3つの側面として捉えるのが妥当であると確認し、中でも友人との関係性維持効力感、臨床指導者との関係維持効力感、臨地実習場面での対人関係における自己効力感尺度となることが明らかにされた。助産師学生ではあるが、同様の側面があると考えられる。本研究でも、友人との情報共有やアドバイスにより支え合うこと、他の学生のケア場面からの学びによって自己効力感が高められていた。さらに、友人からの励まし

はアドバイスだけでなく、気持ちの共有につながり、情報共有と共に意欲的になれる。グループメンバーの存在、支え、励ましは自己効力感を高める重要な要因である。臨床指導者との関係性については、助産ケアに対する良い評価や自己を認められたと実感した時、同様な結果が得られた。また、対象理解や基本的な個別的援助では、対象者を総合的に捉えて理解し、バースプランを立て、栄養指導では個別性を重視していた。その他に、遂行行動の達成で対象者からの賞賛とケアの評価で効果的に実践できた助産ケアの成功体験はもちろん、対象者や他の学生が行って欲しいことを思い描いた専門的なケアの実践をしていた。以上のように3つの側面において同じ結果となった。また、助産師学生は、妊産褥婦と信頼関係を築いていけるかを課題として、本音や思いの表出ができるようにすることがケアをする上で必要であると感じている。これは、対象者との関係性において自己効力感が高まっていることは明らかである。ケアの効果を褒められた時に実践での次へのやる気につながり、その結果人間関係への自信を持つことができる。山崎ら⁹⁾は、看護学生は日常生活の援助を行い、患者との信頼関係を深めていくことによって達成感を得る。患者と関わることによってその喜びを感じることで、次の課題に対する意欲となるのである。「課題を達成した」という自信は、患者との関係に困難を生じて、人間関係を築き、課題の達成に向けて努力していく姿勢につながると考えている。助産師学生についても対象者との関わりで信頼関係が重要であり、課題達成が次への意欲につながるという同じ結果となった。

以上のことから、助産師学生の実習体験が実践を通して対象者への効果的な技術の深まりを実感する時、それを行う過程で人間との関係性において強められ自己効力感が高められていることが明らかになった。

3. 助産師学生の臨地実習で自己効力感が高められる指導との関連

教員は、実習の1週間目は慣れないので、実習環境に適応できるように支援し、学生が演習や学んだ知識が理論的根拠に基づいて実践をする上で重要と考えている。根拠に基づいた効果的な実践が実感できるように、学生を肯定的に支持するだけでなく考える過程が学べるように励ましながサポートすることが必要である。褒めることは重要であるが、山崎ら⁹⁾は、課題達成を伴わない励ましや賞賛は自己効力感を高めるものにはつながらないと考えている。本研究で遂行行動での成功体験で課題達成をした時に自己効力感が高まっていた。学生が課題を達成し成功体験したことを肯定的に評価することで次への意欲的に取り組める。

代理的体験で助産師や他の学生の観察をして自己効力感が高まったという結果があり、言葉だけでなく知識、助産技術、助産ケアに触れることによって高められている。教員は、グループ間での学びが深まるように、カンファレンスでの共有体験や学生間で観察学習という教育方法をとることが必要である。学生の対象者への関わりやケアの評価を実習中にフィードバックすること、学生同士で効果的なケアができたと感じたときは認め合うことで、自己効力感が高められると考える。ゲイバーソンとオールマン¹¹⁾は、教員が、学生に介入方法を指導し、対象の状況を理解できるように導くために直接質問をする。また、フィードバックし、学生間のカンファレンスに間接的な方法を実施することが必要である。学生は個別性があり、教育のレベル、経験、学ぶための適性、学習スタイル、ニーズ、興味、能力が異なるので、教育方法を考えて実施することが必要であると述べている。遂行行動の達成の項目で、何も指導を受けないことは自己効力感を高めることができないと結果が出ており、学生の視点に立った教育方法で指導することが必要である。その他にやる気高める教員の関わりとしては、学生に合わせた自己課題や実習目標の達成ができるように、難易度を少しずつあげて調整することで、自己効力感

が高まるように促すことができる。そして、代理的体験で知識・技術だけでなく、助産師や他の学生の観察や豊かな人間性を通して自己効力感が高まったという結果があり、言葉だけではなく観察学習によって意欲が向上している。これは、助産師学生が人間性にまで近づきたいと考えているのは成長過程であるのは明らかである。

助産ケアの実践をする過程で、教員や臨床指導者、他の学生、対象者から褒められた良い評価だけでなく、指導における言動も学生が実習で今必要であると感じた時、意欲的に学習に取り組んでいた。学生自身が成長できると捉えられた評価や指導は厳しくても、気持ちが半減せず、自己効力感が高められていた。看護学生の時は、気持ちが半減することが多かったが、助産師学生の今は自身のための効果的指導であると感じられた時、もっと知りたい、向上したいという気持ちになり、意欲的に取り組んでいる。学生は、教員や臨床指導者から効果的な指導や評価をその場で説明されることは行動改善では重要である。活動の評価は、学習過程でフィードバックすることでより良い実践を行うために情報を与へ、的確で効果的な指導をすることが必要である。本研究の結果から、課題を達成させること、身近な到達目標を持たせること、正確な知識・技術・豊かな人間性に近づくように良いモデルとなること、理論的根拠に基づいた効果的で個別性のあるケアができるように指導することで自己効力感が高まるようになった。

VII. 研究の限界と今後の課題

1. 研究協力者が3名と少数例で、語られた内容は実習環境の違いがありA大学院生の一部に限られ一般化するのは困難である。今後は研究対象を広げてデータを蓄積し、より詳細な分析をすることが必要である。
2. 質的に抽出した要因の相互関係が明らかではなく、研究協力者の属性や自己効力感の程度を抽出した要因との関連が明確でないので今

後分析する必要がある。

VIII. 結 論

助産師学生が臨地実習で自己効力感を高める因をまとめると以下のことが挙げられる。

1. 遂行行動の達成の具体的要因では、助産師学生が体験を通して対象者の個別性、継続性の面白さを感じた時、意欲的な気持ちになっていた。看護学生の時と比較して助産技術や指導の幅も広がり、助産ケアすることが将来の仕事に直結しており、人との関係性において効果のある助産ケアを実践できた成功体験が自己効力感を高めていた。また、理論と実践が結びついたケアの実践も同様であった。しかし、判断ができなかった助産技術、一方的なケア、動揺した気持ちがケアに影響した時などは成功体験ができずに自己効力感は低下していた。
2. 言語的説得の具体的要因では、教員や臨床指導者、妊産褥婦、友人からの賞賛や良い評価は自己効力感が高まる。さらに、言動と遂行行動の達成が連動すると、助産ケアの実践で成功体験をした時、賞賛や良い評価をされると相乗効果があり気持ちを高めていた。そして、臨床指導者の指導における言動も、熱意を伴う自分のために今臨床に必要な行動と直ぐに結びつく言葉であると実感した時、看護学生の頃とは異なり向上したい気持ちが強い助産師学生の今は、効果的であると感じると自己効力感が高まっていた。しかし、未熟が助産技術への指摘、助産師学生として自覚を促す言葉については自己効力感が低下していた。
3. 代理的体験の具体的要因では、助産師から知識や助産技術の観察学習、専門職としての豊かな人間性に触れて近づきたいとの思い、友人の助産技術からの学びで自己効力感が高まっている。知識、技術、人間性へ焦点をあてて自己効力感が高められていることが分

- かった。しかし、助産師のケアの疑問と産婦への危惧、プライバシーが守られないことへの危惧が自己効力感を低下させていた。
4. 情動的状态では、臨床実習での反省や課題が多く改善が必要な場合気持ちが半減しているが、明日への期待や新たな発見がある時は自己効力感が高まっていた。大学院生として実践したいことが明確であり、向上したい気持ちがそこに集約されている。寝不足から体調が悪い時、考える力の低下、きめ細かな助産ケアができないため、自己の体調管理が悪いと気持ちが半減していた。しかし、実習での原動力となる気持ちをリセットできる方法で自己効力感を高めていた。自分自身の気持ちの変化を受け止め客観視でき、実習を継続する原動力としての自分なりの気持ちをリセットし維持している。
5. 助産師学生は、人間の関係性を維持し、効果的な助産技術の実践、助産ケアの実施をしながら成功体験を実感することで自己効力感を高めている。そして、課題達成できた時に肯定的に教員、臨床指導者、対象者、他の学生から良い評価されることで自己効力感が高まる。教員は、実習環境と学生との関係で生じる気持ちの変化を理解し、学生が必要であると考え身近な到達目標を達成させること、知識・技術・豊かな人間性に近づくように自身のケアと比較できること、理論的根拠に基づいたケアが明確に実感できるように指導することが必要である。
- と今後の課題。京都府立医科大学看護科紀要, 15: 9-14, 2006.
- 4) 山崎章恵, 百瀬由美子, 阪口しげ子: 患者との関わりにおける看護学生の自己効力感(I): 測定尺度開発の試み。信州大学医療技術短期大学部紀要, 24: 61-70, 1999.
- 5) 遠藤恵子, 松永保子, 遠藤芳子, 佐藤幸子, 井上京子, 三澤寿美, 藤田あけみ, 佐竹真次: 看護学生の自己効力感(Self-Efficacy)に関する研究(第1報)ー基礎看護技術演習による自己効力感の変化と影響する要因ー。山形保健医療研究2: 7-13, 1999.
- 6) 眞鍋えみ子, 笹川寿美, 松田かおり, 北島謙吾, 園田悦代, 種池礼子, 上野範子: 看護学生の臨地実習自己効力感尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討。日本看護研究学会雑誌, 30(2): 43-53, 2007.
- 7) 山崎章恵, 阪口しげ子, 百瀬由美子: 看護学生の自己効力感を高める実習指導の検討ー自己効力感の低い学生の実習中の体験からー。信州大学医療技術短期大学部紀要, 27: 41-48, 2001.
- 8) 下村英雄, 岡美智代, 藤生英行: 臨床実習前後の看護技術に対する自己効力感の変化と関連要因。カウンセリング研究, 38(2): 98-108, 2005.
- 9) 山崎章恵, 百瀬由美子, 阪口しげ子: 看護学生の臨地実習前後における自己効力感の変化と影響要因。信州大学医療技術短期大学部紀要, 26: 25-34, 2000.
- 10) 江本リナ: 自己効力感の概念分析。日本看護科学学会誌, 20(2): 39-45, 2000.
- 11) キャスリーンB. ゲイバーソン, マリリンH. オールマン著/勝原裕美子監訳: 臨地実習のストラテジー。東京, 医学書院, 2002.
- 12) 佐々木和義, 門脇千恵, 池内佳子, 竹下由紀: 看護臨地実習における学内事前学習がセルフ・エフィカシーの及ぼす影響。ヒューマン・ケア研究, (3/4): 22-29, 2003.

文 献

- 1) アルバート・バンデューラ著/本明寛, 野口京子監訳: 激動社会の中の自己効力。1-41, 130-229, 東京, 金子書房, 1997.
- 2) 坂野雄二, 前田基成: セルフ・エフィカシーの臨床心理学。東京, 北大路書房, 2008.
- 3) 中川雅子, 笹川寿美, 松井妙実: 日本における「自己効力」を用いた看護教育研究の動向

A Report of Midwifery Clinical Practicum

KATAKURA Yuko

Abstract: This study aimed to analyze factors contributing to self-efficacy development among midwifery students through a clinical practicum. We conducted semi-structured interviews involving 3 graduate students, using Bandura's model of self-efficacy and its four sources of influence as a conceptual framework. Verbatim records of interviews were classified and analyzed inductively. The following items were extracted in relation to the four sources affecting self-efficacy: "midwifery skills enhanced through hands-on experience", "care delivery that they regarded as effective", and "the delivery of effective practice after learning and training" for *mastery experiences*; "positive evaluative feedback" and "comments that increased motivation for learning" for *social (verbal) persuasion*; "appropriate midwifery skills and favorable attitudes of professionals" and "experiences that they found unsatisfactory" for *vicarious experiences*; and, "changes in emotions from the first week of the practicum to the present", "willingness to improve", and "emotions and actions that were affected by physical conditions" for *somatic and emotional states*. These midwifery students maintained relationships with others during practicum placements. It was revealed that, through the clinical practicum, they developed a sense of self-efficacy by: gaining experiences of successful task performance (*mastery experiences*); receiving positive appraisal of their performance, and using comments/feedback to take actions required in clinical practice (*social/verbal persuasion*); obtaining midwifery knowledge and skills, and striving to foster a rich humanity suitable for a midwifery professional (*vicarious experiences*); and, adapting to ongoing emotional changes (*somatic and emotional states*).